

日本研究への道のり —ある知日家の見た戦後の米国、日本、アジア—

ジェームズ・バクスター (口述)
佐藤 有理 (編集)

2016年3月に退職なさる当アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター(以下センター)所長のジェームズ・バクスター先生にご経歴を振り返ってお話を聞かせていただいた。バクスター先生はどのような過程を経て日本研究者への道を歩まれたのであろうか。

1 幼少期、様々な海外経験 (1944~1963)

1-1 幼少期

第二次世界大戦の最中に父は海軍の士官で、あっちこっちに赴任させられ、私が生まれた年、1944年には、テキサス州の南の方のコーパスクリスティ (Corpus Christi) という町の海軍の基地で、空軍部隊、つまり戦闘機の操縦士に訓練を施していました。母も一緒に私はそのまわりの小さな街、キングスヴィル (Kingsville) という街で生まれました。その2ヶ月後、父はまた転勤になり、両親の出身地はイリノイのミシシッピ川の南の方でしたが、そこにも、バージニア州にも一時期はカリフォルニア州にも住みました。それも戦争の時でした。

戦後になって、両親はまたイリノイ州に戻って、私は11歳になるまでその小さな町、イーストアルトン (East Alton) という町で育てられたんです。それまで、一番長かったのはイリノイ州でしたが、1955年に両親とカリフォルニア州のロサンゼルスに夏休みに行きました。その1週間の夏休みの間、父は転職したので、また引っ越しましたが、私と母は一度イリノイ州に戻って、1956年にロスに引っ越しました。ですから、中学校も高校も南カリフォルニアでした。結局、ロスとサンディエゴの両方でしたが、実は1年ぐらいロスで、また父はサンディエゴに転勤になり、それは大体5年間で、またロスに戻ったんです。

当時サンディエゴの学校の制度は6-3-3制(小学校-中学校-高校)でした。今は6-2-4制になっていますが、私が通っていた当時、高校は3年間で、高校2年生にまたロスに移ったんですが、高校1年生の時はサンディエゴのミッションベイ・ハイスクールに通っていました。最近たまたまインターネットで当時の写真、つまり1960年、55年前の年鑑、year book をみつけたんです。野球をしていたんですが、16歳の時ですね。ちょっと懐かしかったです。

それは高校までで、大学に進学して、北カリフォルニアの方に行きました。休みの時には南の方に戻ったんですが、両親はまたサンディエゴに移って、クリスマスとか夏休みの

一時期2～3週、南カリフォルニアに戻ることに50年続きました。結局大学を卒業して、家族を訪問する以外カリフォルニアに滞在する機会はありませんでした。

1-2 香港に派遣される途中で初来日

スタンフォード大学に入学して、1963年大学1年生が終わった頃、VIA¹という組織のプログラムに参加しました。VIAは民間の組織で非営利団体なのですが、創立者は60年代前半のスタンフォード大学“dean of freshmen”²だった人で、受け入れはその国の政府機関ではなく、民間の組織です。私達はVIAが派遣する最初のグループでした。

夏の間の2ヶ月、香港に行って、YMCAで朝には香港の中国人に英語を教えたり、あるいは図書室で本の整理をして、夜は、いわゆる roof top school³。当時、香港はイギリスの植民地だったでしょう。政府は移民した貧しい人のために団地を作っていて、子供のリクリエーションのためにいろいろなプログラムを行っていました。

私達が参加した1963年には24～25名の男子学生が参加して、その次の年から男女になりましたが、その時は夏だけのプログラムでした。今は2～3年のボランティア活動をしているようで、もう香港ではやっていないと思いますが、今はラオスとかカンボジア、ミャンマー、インドネシア、ベトナムとか、中国はわかりません。ある時期は日本でも韓国でもやっていました。今、SOAS⁴の先生として教えている人は、当時そのボランティアを日本でやっていたようです。

そして、そのプログラムで香港に派遣されるために行く途中、2週間日本を訪問しました。東京オリンピックが1964年でしたから、その前の年です。東京は工事中でしたよ。夜中でもどこもかしこも工事していました。泊まったのは四谷でしたが、東京だけでなく、当時関西学院大学の教員だった藤田先生が、非常によく企画して、案内してくださって、一晩、高野山のお寺に泊まったり、いろんな工場を見学したり、国会議事堂で通常国会の様式を見たり、あるいはある大学、慶応、早稲田、関西学院で、日本人学生のグループと会ったりしました。もちろん、私達は全く日本語は話せませんでした。英語クラブだとか、国際関係クラブだとかの学生と言葉を交わす機会を先生がアレンジしてくださいまして、とても印象的でした。当時の日本は若くて、元気いっぱい、目的があって、高度経済成長期の真ん中でした。また、特にアメリカ、西洋を追いかける目的を、ほとんどの人が持っていました。あるいは、とにかく野心があって、目的があって勉強している、元気で努力をしている様子でした。その当時アメリカにはそれほどそれはなかったと私は思って、いやあ、日本はすごいと思ったんです。それは1963年夏の2週間だけでしたが、初めての日本の滞在でした。

1-3 ドイツへの留学

大学に入学した時は、ドイツ語を学びたいと思っていました。既に私の3歳年上の従兄

弟が、ドイツで1年間勉強して、上手になったことに憧れていました。彼は優秀な人で、後に有名な眼科学研究者・医科大学教授になったんですが、彼を真似して、ドイツは哲学の国、学問の国であることしか知らずに、ドイツ語を学びました。ドイツ語1年生として、短期記憶がよかったから成績がよかったんですね。

そして大学2年生になった時に、スタンフォード大学では、ドイツに6ヶ月間留学するプログラムがありまして、南ドイツのシュトゥットガルト (Stuttgart) の近くのボイトーゼバーハ (Beutelsbach) という小さな村落でおよそ70名の学生が午前は集中的にドイツ語を学んで、午後は英語でスタンフォードの教授が来て、短期的に教えてもらいました。その同じ学生グループに、後に妻となるイレイン (Elaine) もいました。だからドイツで知り合いました。でもすぐにはカップルにはならなかったんです。

そのプログラムが6月に終わって、私と友人2人は、もう少し滞在したいと思って、労働局に行って申請したら、すぐ就職できました。その時、ドイツは労働力不足の状況でした。当時のドイツには、ギリシャ人が多かったんですが、その後トルコからの労働者が多くなりました。とにかく、外国人として、アメリカ人じゃなくても、仕事が欲しいと労働局に申し込めば、就職できた時代ですから、その夏、私は友人とシュトゥットガルトのすぐ近くのダイムラーベンツ社の工場で働いたんです。いわゆる試験部または品質管理部で自動車部品を他所の工場からその工場に集めて、車を組み立てる前に、その部品の中から取り出したサンプルをテストしました。何の技能が無くてもいい仕事だったので、私でもできましたが、考えられないほどつまらない仕事だったんです。

その当時ドイツは日本と同様に高度経済成長の途中でした。“Wirtschaftswunder” と言いますが、それは、経済の奇跡という意味です。当時ドイツは東西に分かれていたんですが、私達のいた西南部は経済的には恵まれていました。1945年の敗戦から1949年までドイツにも戦争で勝利した連合国 (米英仏ソ) の占領があったんですが、西南部はアメリカの統制下の地域だったんです。そして1949年に占領支配が終わってドイツ連邦共和国が成立して15年経ち、西ドイツは比較的豊かになりました。私にとって、1964年8か月間の滞在は貴重な経験でした。

2 日本研究を選択することになった経緯、大学院生時代 (1968~1976)

2-1 韓国でのボランティア体験

そもそもスタンフォードに入った時、弁護士になろうと思ったんですが、4年生になって、LSAT₅の成績はまあまあで、一番上のレベルではなかったんです。それでも法科大学院に進学できる水準に達していたと思います。しかし、法科大学院に申請しませんでした。なぜかという、試験そのものが嫌だった。これが法律であれば嫌だと。また、当分勉強はしたくない。ベトナム (戦争) にも行きたくないが、どこかでボランティア活動ができ

れば、自分の勉強になると思いました。今、法科大学院に行かなくても、それは将来可能であると。大学院の地域研究科に入ってもその後法科大学院に入るのは可能だと思えました。それで、韓国にボランティアに行くことにしました。

大学を卒業したのは1966年でしたが、ピースコア (Peace Corps)⁶ のプログラムで韓国に行きました。妻とはドイツの留学中に知り合いましたが、一緒にピースコアの本部に韓国の新規プログラムに入らせてくださいと申し込みました。

入団する時に選抜試験がありますが、その一部は言語能力の試験で、具体的にどんな試験だったか覚えてはいません。1つだけの言語ではなかったんですが、とにかくああいうようなテストがあって、ある基準に達すれば、韓国に行けるのではないかとピースコアは判断したんです。韓国語 (コリアン) が難しい言葉だとはピースコアの上層幹部は理解していたようです。大体韓国語は日本語と同じくらい難しく、発音は日本語より難しく、それで、韓国のプログラムの選抜は特に厳しかったそうです。私は高校時代に4年間スペイン語も勉強していましたし、言語に興味があって、ある程度能力があるとわかっていたんですが、外国語学習経験がどれほど重要だったかわかりませんが、試験にはそれが役だったのかもしれない。

それで、採用と言ったらおかしいですが、ま、ボランティアといいますけれども、ハワイでの訓練・研修に行きました。そのトレーニングのおおよそ8週間はハワイ島のヒロで、2週間はコナの方でした。私達がハワイにいたのは、1966年の夏ですから、49年前です。当時のヒロ市は人口2万5千人ぐらいだったと思います。その当時言われたのは、アメリカ全土でヒロは、人口に占める少数民族の比率が最も高い都市。都市と言ったらおかしいですけど、市でしたね。もちろんその多くは日系アメリカ人でした。ハワイ人もフィリピン系アメリカ人もアフリカ系アメリカ人もいましたが、とにかく白人よりも少数民族の民族が多くいました。静かできれいな町でした。レインボーフォールズ (Rainbow Falls)、訓練施設はそこでした。看護師の寮でした。当時ハワイ大学のヒロ校はなくて、看護の学校が研修地だったんです。夏でしたが、雨天の時も晴天の時も暖かくて、天気もよかったです。

研修は10週間ぐらいで、長くはなかったんですが、そのトレーニングの2ヶ月の間にイレインと結婚しよう決めて、そして、バタバタして家族と相談して、ハワイで結婚することに決めました。ですから、ホノルルで結婚して、つまり研修プログラムの終わりと韓国の渡航の間、4日間しかなかったんです。その間に結婚して、2日後に韓国に行ったので、「2年間のハネムーン」は韓国でした。

しかし、韓国語の勉強ですが、勉強したのは2ヶ月間で、またそれは初代のピースコアプログラムだったから、ピースコアはどうやって教えるかを知らなかったんです。ハワイ大から講師を雇って、急いで初級レベルの教材を作ったんですが、本当にベーシックだった。私は韓国に行った時、言語が得意だから、すぐ覚えられると無頓着すぎて思ったんですが、特に勉強しなかったんです。ですが、時間が経てば経つほど上達がなく、勉強しな

くちやとわかって、清州大学校の女子学生を講師として雇って、延世大学の教科書を買って、それを元に2年目に勉強しました。大体2年目になって、東アジアは面白いと思って、ま、前からそれは思っていたんですが、もっと知りたいと思って大学院に進学する希望を抱き始めました。

2-2 韓国語から日本語へ

しかし、何を勉強するか。その時点で研究者になることは目指していなかったんです。修士をとって、法科大学院に行こうか、あるいは、アメリカの国務省に入ろうと思いました。とにかく当時研究者になりたいという希望はなかったんです。だから地域研究科に申し込んだんですが、その当時、いろんな大学院のプログラムに申請を出して、最初は悩んだんです。西海岸にしようか、東海岸にしようか。卒業したスタンフォード大学は西海岸だったから、東海岸に行けばためになる、啓蒙になると思って。しかし、どこにするか、コロンビア、プリンストン……。結局ハーバードを選んで入った時、韓国の歴史を中心にしようと思って、中級韓国語や、中国史、日本史、中国の思想学、いろんな分野の授業を受けました。特に専門ではなくて。

しかし、入学してすぐ、初級日本語の授業に出たんですが、韓国語をある程度覚えていたから、日本語はやさしいと思ったんです。発音はものすごくやさしいし、文法は韓国語とほぼ同じで、漢語が多くて。発音は違いますが、大体共有されていて、上手だと思ったんです、自分で。ですが、それは大間違いでした。漢字はどんなに難しいか、日本語で漢字を読み、また訓読みがこんなにたくさんだとは知らなかった。自分で言うのは変ですが、初級は完璧に近かったんです。だから、できると思ったんですが、実際に、それは正しくないとわかったのは、大学院に入学して5年目の日本に来た時、金沢に行った時、生の資料に取り組みもうとした時でした。それまで、試験のために勉強するのは十分だったから、自分はいまいち思っていたんです。短期記憶はまあよかったので、試験のために勉強していい成績をとったんですが、事実上は覚えなかった。短期だけ。また、実際に利用できなかったんですよ、会話では。読解力も驚くべきほど弱かったです。

日本語の初級はジョーダン (Jordan) のテキスト⁷を使いました。私にはそれは非常によかったと思います。文法の説明はきれいで合理的だと思ったんです。しかし、それは1年だけ。漢字はその1年生の時、150か200字ぐらいだったと思いますが、また、主に1つ2つだけの読み方を覚えたんですけどね。韓国滞在の2年目から自分で「ハンジャ」（漢字）を学ぼうとしていたので、ある程度漢字が書けるようになっていました。しかし、当初は日本語を勉強する目的は韓国史を勉強するためで、解読力、つまり受動的なリテラシーだけあれば十分で、話す能力や書く能力は特に要らないと思ったんです。振り返れば、それは馬鹿馬鹿しい誤解だったと分かっています。

しかし、韓国語について、残念ながら、それを止めたんですよね。大学院で2年勉強し

ましたが。その当時、韓国史の担当はエドワード・ワグナー (Edward Wagner) 先生だったんですが、彼はエドウィン・ライシャワー先生⁸の教え子で、専門は李朝時代⁹の社会史だったんですが、優秀な研究者でとても優しい方でした。彼と彼の奥さんの下で2年韓国語の勉強を続けたんですが、しかし、目的は読むこと。授業では朗読して翻訳しました。あまり会話はしなくて。また、文法の全体、文法のルールを全体を把握する目的ではなかったんですが、その2年目にこれから日本史を学ぶ決意をして、もう韓国語を勉強しないと。それから後は時々、例えばパーティで韓国からいらした大学院生や客員教授と韓国語を話したんですが、ほとんど使わなくなりました。今は40年以上、使わなくなってできなくなってしまいました。5年前に妻と1週間、韓国に帰りましたが、まあ、店の看板は読めますが、しかし、もうしゃべれなくなりました。もったいないですね。

2-3 日本研究を選択した大学院生生活

日本語と中国語と韓国語を同時に勉強するのは、難しかったんですが、楽しみもあったんです。それぞれの独特の味がありますからね。中国語も先生は非常にうまかった。私の授業は、現代中国語ではなくて、日本研究や韓国研究を専攻している大学院生のためにつくられた中国語コースだったんですが、教えてくれたのは、今はマサチューセッツ大学アーマス校の名誉教授になっているブルックス (Brooks) 先生でしたが、天才だと思います。自分でその教科書をお作りになったんですが、最初の秋学期に唐代の詩から始めたんです。入り口としては、中国文明に入るのに、本当に良かったですよ、あんなに面白いことがあるとは。当然だと思うんですが、中国文明に憧れて、3千年の素晴らしい歴史があることはわかっていましたが。また、それは、第1期、秋学期だったんですが、あとは2年継続して明代まででした。部分的には古典をたくさん見せてもらって、もちろん、漢字の旧字体、難しくて美しいと思って。そういうことを味わうのは楽しみです。

どういう授業かということ、まず詩があって。ブルックス先生は元ピアニストなんですが、耳がよかったんです。奥さんが日本人で大学院生の時京都に何年か滞在しているんですね。また京都大学は中国古代史の中心地だったんですが、とにかく、彼の発音をまねて、中国語の音も学びました。私は歌は歌えません。いや、本当に歌えません、音痴ではないんですが、歌は歌えません。しかし、中国語のトーンはなぜか、会話じゃなかったんですが、もう覚えていませんが、授業の準備のためとか、試験のためとかはよくできました。それも、その中国語の特徴も魅力があると私は思っています。中国語も韓国語も日本語も共通点はありますが、独特の味があって面白いと思ったんです。同時に勉強しても、楽しむことができました。後々まで覚えるまでではなかったんですが。ある同級生は頭がごちゃごちゃになることが問題だと文句を繰り返している人もいましたが、私は当時はそれほどなかった気がしました。とにかく、私には言語の勉強が楽しかったです。

大学院に進学した時の最初の授業は、朝9時の講義だったんですが、政治学研究科の授

業で、講師はエドウィン・ライシャワー先生でした。ライシャワー先生が大使を辞めてハーバードの教授に復帰して3年目だったと思います。私が受講した授業は、政府と政治制度についてでしたが、ライシャワー先生はもともとは歴史家で、歴史学の観点からものを見たんです。私は、大学院に入学した時点で日本史と日本語を学びはじめてはいましたが、それが専門になるとは思わなかったんです。しかし、大学院2年目に、やはり日本歴史の勉強を継続してみたいという希望を持ち始めました。その時はまだまだ絶対に研究者になりたいとは考えていなかったんですが、とにかく博士課程に入って継続しようと思ったんです。しかし、申請するのに、何を学ぶか、専攻は何か問われるんですよ。さっきも言いましたが、2年目から中国語も始めたんですが、それも好きでした。中国の文明はすごい、ということは、私にあって、もっと知りたいと思ったんですが、言語のレベルを見ると、それはあまりにも野望的で、野心的で、現実的ではないとわかったので、日本近代史の先生に日本史にしていいていいですかと聞いたら、優しく受け入れてくださいました。それで、また、ハーバードで大学院生活を継続してしまいました。

当時は1960年代でしたから、奨学金が多かったです。今もFLAS₁₀がありますが、それに当たるプログラムは結構多くて、財団のお金もあって、フォード・ファンデーションとか、ソーシャルサイエンス・リサーチカウンシルとか、いろんな基金、財団、アメリカ政府からのお金が奨学金としてありました。ですから、ハーバードは、当時も今も学生に与えられる奨励金は、他の大学に比べて恵まれていると思います。

それで、学生数は、人数ははっきり言えませんが、多かったです。韓国語、韓国研究、同じピースコアのグループから7名だったと思いますが、1人は今はハーバードの韓国朝鮮文学の教授をやっている人ですが、とにかくハーバードだけで7名同じ同級生で、また他からも。だから、韓国研究の分野だけで15名ぐらいでした。もちろん、中国研究や日本研究はそれより多かったです。今の東アジア研究専攻の大学院生の人数と比べると多かったと思います。

毎週金曜に勉強会、コロキウム (colloquium)、セミナーというか、発表会がありました。発表者は主に教員、または博士課程後期のかなり論文が進んでいる学生、また多くのコロキウムは、アメリカの対アジア政策やベトナム戦争でのアメリカ軍の行動などを中心にしたテーマでした。外部からの発表者もいましたが、そのコロキウムは、韓国、日本、中国研究専門の教員達、学生達が意見を交わす場になって、コミュニティ作りの役割が大きくてよかったと思います。テーマは幅広く、現代政治とか、学問的なテーマもあれば、経済発展、いろいろな議論の場になりました。

私が大学院1年生の時、春学期に、ハーバードでもストライキがありました。同じ年にはコロンビア大学で、その前からバークレー、ミシガン大学でもありました。私と私の友人達もストライキに参加しました。つまり、大学闘争はハーバードでもあったんです。また、当時、アメリカは徴兵制がありまして、男性のみだったんですが、26歳まで兵隊の義

務があつて。しかし、徴兵制でしたが、全員ではありませんでした。軍隊の必要に応じて、人数を決めて、その当時、抽選になったんですね。年の初めに番号をもらって、その番号の順番で。その戦争反対で徴兵制反対の運動が強かったです。まあ、私もそれに参加したんですが、デモをしたり授業をボイコットしたり、バナーや看板を持ってハーバード燕京図書館¹¹の前で立ったり回ったりして前後に行進したり、ニクソン政権やアメリカ軍への大学の協力に対して反対する意思を表明しました。

2-4 フルブライトで金沢に留学（2度目の来日）

ちょっと、話はずれますが、私は集中的に日本語を学んだことはないと前からセンターの教職員に言っています。私は1年間初級日本語と中級日本語を学んだ時、ああいうような環境で中国にも韓国にも関心を寄せていて、また、私生活で、その戦争反対運動に取り組んで、試験のために日本語を習ったんですね。・・・残念です。本当に残念です。また、ハーバードでの博士課程後期、つまり総合試験を受けた後の資格 (Ph.D.candidate) ですが、それになるまで、私は4年目の終わりに、その試験を受けて、また、先生が甘い評価をして、合格させてくださいました。つまり4年、ハーバードで4年間日本語を習ったんです。しかし、同級生の何人かは当時東京にあった日本研究センター¹²に行つて、帰つて来た時、もちろん日本語がうまくなつたとわかつていたんですが、私はお金の問題、また既に結婚していて、長男が生まれていたんです。ですから、私にとってセンターで1年間日本語だけ勉強するのはあまりにも贅沢だ、それをする余裕がないと思っていました。しかし、幸いにして、フルブライト¹³の奨励金をもらつて金沢に行くことになったんです。それは、良かったんですけれども、今顧みると、むしろ、1年間センターに来た方がよかつたと考えます。それは40年前の話ですが、今もそれを痛感します。

もともと私は地方史、地域史に興味があつて、大学院の時、比較できるために少しヨーロッパ史、ヨーロッパ社会経済史を学びました。当時の盛んな研究は地方史でした。ヨーロッパ地方史ですから、地方ではどのようなレベルで発展があつたか、特に産業革命の時。その研究を踏まえて19世紀の日本での地域レベルの社会経済の移り変わりをテーマにしようと思つていいたんです。しかし、金沢に着いた時、金沢市や石川県においてそのテーマを追求する資料を探すのは非常に難しく、それは無理だと気がついて、研究対象を変えました。むしろ、統一国家が地方レベルではどういう風に形成されたかに変更したのです。

金沢は第二次世界大戦では戦災はなかつた、空襲がなかつたのを知つて、研究資料として使える企業史の記録がたくさん残っているだろうと思つたんです。まあ、1970年頃ですから当時はもちろんインターネットはなかつたので、どんな史料があるのか具体的にわかりませんでした。ある程度地方史が出版されたと知つていたんですが、近代史研究に利用できる生資料があるかどうか分かりませんでした。『石川県史』とか『金沢市史』とか、またその資料編がありましたが、多くはなかつたんです。また、目録、資料館や図書館な

どの目録がありましたが、それは充実しているとは思えませんでした。だから、行く前にどれほどあるのかよくわからなかったんですが、たくさんあると思って。実際にはあったかもしれませんが、奨励金をもらっている期間の間に見つけることはできなかった。見つけられなくて、どうしたらいいのか。解決は『金沢市史』とか『石川県史』とか、いろんな学術雑誌に出ている論文を中心に政治制度での移り変わりを分析して叙述したらどうかと決めて、テーマを変えて研究したんです。

それで、博士論文は、19世紀の移り変わりに関して地方でどのような変化があったか、地方の人々がどういう役割を果たして、どういう経験を経て、統一国家の明治国家の日本人になったかということでした。ケーススタディとしては、幕藩体制で一番大きい藩、伝統文化が栄えた加賀藩を研究しました。19世紀、近代になって地理的に不利な存在ですよ。また明治維新の時にはあまり活躍しなかったんです。1860年代の前半には尊皇攘夷運動に参加した人もいましたが、藩の当局がそれを圧迫して自刃を命じました。維新の時に日和見的な態度をとったのは加賀藩で、明治政府が形成されてからそれは不利でした。人脈もなかったし、地理的に恵まれていなかったし、鉄道開発が遅れたし。まあ、いろんな事情があつて。しかし、文化、教育、文明のレベルは高い地域です。100万石の加賀藩だから、城下町としては人口は10万人を越えていましたし、日本の都市の中で、江戸、大阪、京都、その次は名古屋だったでしょうか、金沢だったでしょうか、その5つの中に入る町で。だから、町人文化がとても発達していて、とても面白い場所ですよ。料理もおいしいですし、小京都というんですが、例えば、お能とか、お茶とか華道などなど。領主の前田家は、その当時の大名の中では特別な存在で外様大名だったんです。初代の藩主前田利家は、秀吉の同僚と言っていいでしょうか。5人の大老の1人で秀吉が亡くなった時、徳川家康とも位が同じだったと言えるかもしれませんが。また、家来の中では、多くの大名より禄高が高かったんです、5万石だとか。とても面白いケースだと思いました。

3 大学教員からビジネス界への転身 (1976~1983)

3-1 講師時代に3度目の来日

結局1976年までケンブリッジ (Cambridge) に滞在して、その間に1年はフルブライトで金沢でしたが、76年にまだ学位をとっていなかったんですが、バージニア大学に就職できて、歴史学研究科のメンバーになりました。当時は、acting assistant professor、準助教授、臨時助教授といいますが、つまり講師です。76年から83年まで歴史学科の教員でした。7年間、学部生に日本史全体、古代から現在に至るまでのことを教えました。そして、1978年、やっと博士論文を提出して学位を取得したんですけれども、それで、準助教授ではなくて、助教授になりました。

そして、1979年にサバティカル¹⁴をとって、正確に言いますと、サバティカルではなく、

無償休暇、ですか。国際交流基金から研究助成金をいただいて、大学から1年間無償休暇をとりまして、もう一度日本に渡りました。

東京に滞在しましたが、ある時期は横浜国大にいました。行政法の授業でしたが、担当教授は有名な教授だったんです。しかし、私の住まいは東京都豊島区で、研究には当時の国大図書館は参考になる資料が少なくて、横浜国大はそれほど私の研究にぴったりあう機関ではなかったのです。それで、途中で東京大学の法学部の三谷太一郎先生に連絡をとって、厚かましく紹介なしで手紙を出して、可能であれば東大の法学部で客員研究員とかにしてもらえないかと提案したんですけど、三谷先生は親切に受け入れてくださったんです。彼はそれをアレンジしてすぐイギリスにサバティカルでいらっしゃいましたが、代わりに斉藤真先生、有名な政治学者、アメリカ研究の第一人者の先生が面倒をみてくださったんです。

日本は既に1972年～73年に私が金沢に行った時、大学闘争があった後で高度経済成長がそれまで続いていました。ですから、当時ある意味、豊かな社会だと思いました。確かに初めて日本に来た時、63年は豊かになりつつあるように感じたんですが、必ずしもその目標に達成しているわけではない、アメリカとの生活水準の差があるとすぐ感じられました。しかし、70年代前半にはもうそれはそれほどではなくて、1980年にはほとんどないと思いました。といっても79年と80年に滞在したのは東京と横浜で、地方ではなかったんです。

1979年の時は家族も来日しました。次男は金沢の時に生まれていましたが、彼も長男も日本語ができず、東京に滞在している間、学校はホームスクールをしたんです。行く前に、バージニア州アルバマール郡 (Albemarle County) の小学校教育の担任の先生に相談して、適切な教科書を借りました。妻は、バージニア大学の教育大学院で修士課程をして、バージニア州の中学高校の教師資格をもっているんですが、しかし、まあホームスクーリングならそれは要らないですね。私達は思ったんですが、1年間だけなら日本語がわからない子を日本の小学校に行かせるとしたら、彼らにとって難しいのではないのでしょうか。むしろ、困難があるかないかというのは子供個人の性格によりますが、ちょっと心配なので、うまくいかなかった場合どうかと心配して。だから、3人は頑張って、妻も上手にして。それでアメリカに戻った時、学校に復帰する問題はなかったです。夜、私も子供と一緒に本を読んだりしたんです。それは1979年と80年の11ヶ月ちょっとでした。当時イランの革命、またアメリカ大使館の人質事件があって、ひどい1年でした。また、帰国したのは、1980年の秋で、大統領選挙でレーガン氏が当選しました。帰ったらアメリカが違う国になっていると感じました。また、私達がアメリカに帰った時、経済は不景気、一方でインフレが2桁でひどかった。助教授の給料が低かったんですが、インフレがもっと大変で私達に芳しくはなかったんです。

3-2 キャリアチェンジ

バージニア大学で7年間助教授をして辞めて、ニューヨークの大手銀行に雇われ、結局1983年から1999年まで16年間仕事をしている間ずっとニューヨークでした。まず、アメリカの銀行 **Manufacturers Hanover Trust Company** という銀行ですが、そこで4年間仕事をして、1987年に、ある日本の銀行のニューヨーク支店にヘッドハントされ、そこに転職したんです。

アカデミアからビジネス界へのきっかけはいろいろありました。一つは給料。もう一つは、私は学者として遅い。論文や本を出すのに遅い、遅すぎる。だから、バージニア大学で昇進できないだろう、と自分自身で判断して、辞めさせられる前に辞めたい、あるいは、将来辞めさせられると思って、それなら辞めて他の仕事を探した方がいいのではないかと。また、当時私が自分に説得しようとしたのは、同じ日本史入門を毎年繰り返して教えるのは面白くない。事実はそうじゃないんですけど、それは **rationalization**、偽理屈ですが。著書、論文、研究業績が少ないと昇進できないし、継続もできない。今も多くの大学の制度は同じですが、准教授になってから7年の間昇進しないと契約の期限が満期になって、もう残れない、継続できなくなる。その当時もそうでしたが、7年はメドですが、3年目に中間評価があって、それがうまくいかなかった場合、継続ができない場合もありますが、とにかく、7年は多くの大学で1つの目安です。ほとんどの場合は8年までは続けられないと思います、昇進しないと。昇格があれば、それはテニユアでパーマネント¹⁵になりますが。その昇進の基準は大学によりますが、私が所属していたバージニア大学はかなり水準がその当時は高かったし、今も高いですが、州立大学の中ではそれは高い方でしたから。

またもうひとつのキャリアチェンジのきっかけ、80年代前半は他の国に比べて日本経済の繁盛期でした。だから、私は日米関係で一番面白いのはビジネスではないかと思って、また、就職できたら、日本に転勤させてもらえると思って期待していました。最初に1983年に雇われた時、それがあろうと、私も銀行も思っていたと思います。しかし、ちょうどその時、80年代に銀行業界、あるいは金融業界と言った方がいいかもしれませんが、商業銀行と投資銀行の競争が激しくなって、商業銀行が負けたといっても過言ではないと思います。伝統的な事業の多く、つまりお客さんと企業との取引、を投資銀行が奪ったと思います。つまり、商業銀行の伝統的な仕事は貸出をする、預金をとって、貸出をして、その利息で儲ける。しかし、投資銀行は別の金融商品を作って、もっと幅広く企業の観点から見れば安く、その企業との関係を運営できるということで。ですから、わたしがいたのは商業銀行でした。でもその商業銀行の中で、1つの部署は投資銀行に類似する事業をしていたんですが、私は伝統的なコルレス (**Correspondent**) 関係、銀行と銀行との間の取引の関係担当でした。

私の相手は日本の地方銀行でした。横浜銀行とか。ちょっと話は長くなりますが、それはそれほどエキサイティングではない、むしろ、地味で、儲かる仕事ではなかったんです。

ですから、私がいた **Manufacturers Hanover** には、私のできる仕事は限られていて、昇進の道は狭かったんですね。同じ時期に日本の企業とアメリカの企業との間の取引が爆発的に増加して、また、日本の金融機関はアメリカに進出、あるいは「侵略」していたんですね。非常に積極的にアメリカだけではなく、世界中、特に北米、カナダと事業開発が活発に。それで日本の銀行や証券会社は多くの外国人を現地で採用して、拡張していたんです。それで私も採用されたんです。

採用したのは、安田信託銀行のニューヨーク支店で、採用されて2年目でしたが、安田信託は野望的な計画で米州本部という部署を設立しました。ニューヨークだったんですが、日本から役員（取締役）を米州本部長として派遣して、私もその部署に所属していました。米州本部の仕事は、おおよそ、6年続いたんですが、その部署ができてすぐ、日本国内でバブルが崩壊してしまったんです。1990年代前半、我々が思ったのは、日本の株価、地価がすぐ元に戻るだろうということです。不景気はそれほど長く続かない、と多くの人は思いました。しかし、なかなか戻らなくて、むしろ逆に段々株式市場の株の価格は下がって、結局、野望的なバブル期に行なった貸出の多くは、不良債権になったんです。どんどん、つぶれていって。そして安田もつぶれそうになって、つぶれる直前に関連銀行、富士銀行に吸収されました。

ともかく、私は、銀行員をした16年の長い期間、日本に派遣されなかったんです。安田に移って、それはもう不可能だと確信しました。安田の同僚の多くは日本人で、たまには、特にゴルフをやる時とか、飲みに行く時とかは日本語でしたが、実は日常の業務の時、ほとんど英語でした。日本の同僚とも英語。彼らは一生懸命英語を習っていましたから、うまい人もうまい人もいました。日本の顧客との取引はもちろん日本語で行われていたんですが、それは日本人の行員の担当で、外国人の行員は関わっていませんでした。そしてニューヨークでは全ての業務書類も英語でした。

4 ビジネス界から再びアカデミックの世界へ（1999～現在）

4-1 国際日本文化研究センター（日文研）に就職

1999年に安田信託銀行を辞めたのは、2月でした。そのちょっと前、京都にある研究機関、当時の文部省が創立した研究所、国際日本文化研究センターの新しい部署、海外研究交流室の採用が決まりました。

私は、それまで単身赴任の経験はありませんでしたが、99年に日文研に採用された時、必ず4月1日に職場に出るように言われて、独りで先に行きました。しばらくの間、妻はニューヨークに残って、家を売る準備をしたり、また彼女と友人はアメリカ史、ある家族の3代の歴史についての本を作成する最後の段階だったんです。その間は私は単身赴任でした。ニューヨークの家を売ったのは7月で、短期間にアメリカに戻って、引っ越しの準備

備を妻と一緒にしました。日本に来たのは8月でした。日本の住まいですが、日文研は国の機関で、その教職員は公務員でしたから、公務員宿舎に居住することができ、京都で2人で宿舍生活を送りました。

キャリアチェンジの理由は説明するのに簡単ではないと思いますが、1つはまた銀行の仕事を何年か続けて、これも私にふさわしいかどうか、また、将来が見えなくて、やはり、博士論文を書きなおして、本として出すべきだと思って。あ、言い忘れましたが、1983年に私はバージニア大学をやめてニューヨークの *Manufacturers Hanover* に転職した時、直前ですね、ハーバード大学の東アジア研究協会 (*Council on East Asian Studies*) の出版局と本を出す契約を結んだんです。自由な時間を使って、その次の年に書き直した原稿を出すつもりでしたが、なかなかそれをしなくて。91年でしたが、つまりニューヨークに行って8年目。その出版局の編集長から手紙が届きました。提出するかどうか、提出するとしたら、来年中に提出しろと。だから、それがあって、それが刺激になって、熱心に書き直す作業に取り組んだんですが、締切日の前にそれを提出して、実際にそれを本にするのに時間がかかりました。そしてやっと1994年の終わり、いや、1995年のはじめに製本され、出ました、やっと。書き直すという作業で、やはり、その間、銀行の仕事をしていた間、新しく出た論文を見たり、それに少なくとも脚注にそれに触れないと物足りないと自覚して、少し新しい研究をしたんです。が、これは面白いと思って。銀行の仕事は、必ずしも私にあっていないという思いと、研究は面白い、新しい研究分野として、金融の歴史、銀行史、戦前の6大銀行のことを追求したらどうかと考えて、大学教員としての新しい仕事を探し始めたんです。

しかし、90年代の半ば、95年以降、なかなか探せなかったんです。その当時既に私は50歳でした。50歳で、大学のポストを探すのは難しいです。また、私のテーマは、現役の大学院生のテーマと違って、話題になっていなかったんです。かいつまんで言いますと、アメリカの大学では就職できなかったんです。95年から99年までの間、その間、安田の仕事をしたんですが、98年に大学院の時の親友から連絡があって、京都には新しいポストがある、興味はないか、あれば紹介するという連絡でした。

それで、人脈に恵まれて日文研で採用されました。99年、4月1日の赴任。日文研は創立されたのは87年です。規模は、その当時、専任教授、助教授と言いましたが、おおよそ25名。国の作った16の研究機関、いわゆる大学共同利用機関¹⁶の中で一番小さかったんです。日文研は、機構そのものは行政改革で2004年にできた機関ですが、今は人間文化研究機構の6基盤機関の1つで、その構成は、民博、歴博、地球研、国文研、国語研、日文研¹⁷から成ります。

2001年から2009年まで、私は日文研の英文学術雑誌『*Japan Review*』の編集長を務めました。編集長の仕事は、まず論文を求める、査読してもらい、また多くの論文の場合は、執筆者に書き直してもらったり、自身で手を入れて部分的に、もしくは完全に書き直した

りすることです。日文研だから、「国際」文化研究センターなんです。研究所として目的の1つは、海外で日本研究をしている研究者を呼んで、助成して、研究の発展を促進することですが、見返りに論文を求めます。フランス人やロシア人、ドイツ人、イタリア人等欧米各国からも、アジアの各国からの研究者も京都の日文研に来ています。その中には、日文研の『日本研究』という和文の学術雑誌に原稿を日本語で出す人もいます。しかし多くの客員研究員は英語で書いて、『Japan Review』に提出するんです。また、日文研外部からの投稿、いい論文を募集します。実は、募集活動は時間と手間がかかります。あるいは、「はいはい、もうじき原稿を提出する」と言って提出しない人もいます。また、注意不足の研究者が案外多くいました。

4-2 言葉に対する意識、文章力を高める方法

とにかく、私は話は上手ではなく下手ですが、書くのは、正直に言って失礼ですが、普通の研究者よりも注意をもって、正確で文法的にも論理的にも、英語の作文を書くのが得意です。ある人に憧れて真似しました。特に意図的にそれをしたのは大学に入ってからですね。スタンフォードの同級生の中で、あるいは年上の学部生で、いい高校、私立高校、あるいは、教会（例えばカトリックのイエズス会）が営んでいる学校を卒業した学生で、つまり高校レベルで優れた教育を受けて、また生まれつき頭がよい学生で、授業の中で私は彼や彼女達から習おうとしました。彼らは非常にうまく自分の意見を表現できて、また作文、論文がきれいで、成績はAで、真似ようとしたんです。大学院でもそれを続けて、意図的に自分を鍛えようとして。また、結婚もよかったですよ。結婚相手のイレインは、英米文学専攻の大学の同級生で、読書が大好きな人です。私より彼女はたくさん読んでいます。毎日毎日いろんな分野を。それから、大学院の時から、いいモデルを探して、特に雑誌の『The New Yorker』とか、『New York Review of Book』とかほとんど毎週読んでいます。今朝もちょっと『The New Yorker』のものを見ていたんですが。イギリスにもアメリカにもいくつかの品質が高い雑誌があって、書評も小説もインベスティゲイティブ・ジャーナリズム (investigative journalism)¹⁸ もニュース分析も、その紙面に掲載されるんですが、共通点は、文章の質が高いことです。ある程度、それはそれらの出版物の編集者のおかげでしょう。そして、私は何10年も『The New Yorker』などを読み続けて、その上級雑誌の文章をモデルにしているんです。

モデルにするとは、言葉遣いと文章構造の両方です。あるいは、ある作家は、例えば、ジョン・アップダイク (John Updike) 風とか、ジョン・マクフィー (John McPhee) 風の文体だったりします。それをコピーする人もいます。私はコピーしないんですが。細かく読んで、ああ、そういうスタイルか、いいなと思って、それで、この次書く時は、もっと文章を短くできないかとか。それはあくまで目指しているところ、目安ですが、達成したとは絶対言えませんが、でも目指しています。質の高い文、きれいな文とは、わかりや

すいことですね。わかりやすいと言えば、あまり文章が長いとちょっとわかりづらくなる。短いイコール良いわけではないですが。それから、また言葉遣いです。適宜適切な言葉を使うのが、私はいいと思います。20年ぐらい前までは、単語が難しければいいと思っていました。一般人の知らない単語を使う方が面白いと思っていましたが、けれども、それよりやはり、明瞭さ、明らかなさ、わかりやすさの方が、いいのではないかと考えを改めつつあると思います。

『The New Yorker』の誌面に出ている文章の中には、ああいうような一般人が知らない単語や表現がたまに出てきますよ。多くの執筆者は、やはり、その語彙が豊富であればある程いいと思っています。文章が簡単であれば評価できると言いたいですが、基準を設定して一般論を述べるのは難しいと思います。ある執筆者は長い文章を書いてもそれが明瞭であるので、誰でもわかる、素晴らしい、という印象を受ける場合もありますがね。結局、文章のスタイルの鑑賞、またはその評価は複雑だと思います。

4-3 センター所長の体験、アメリカに帰国すること

日文研は10年間、つまり定年までいました。実は定年退職する日は、2010年3月31日になる筈でしたが、2009年9月1日からセンターに来るように言われました。京都の滞在と横浜の滞在を合わせると日本の生活は16年になります。その間、アメリカに帰ろうと思ったことは特になかったです。まあ、でも孫が米国にいますよね。もうこの秋に8歳と6歳になりますが、早く大きくなっていますよ。後期高齢者にならないうち、孫の近くにいたいと思っています。前からそう思っていますが。それで来年、3月に私の契約が満了になったら、2～3ヶ月後に帰国する予定です。しかし、アメリカの生活はどうでしょうかねえ。あらゆる面ではないのですが、ある側面では、アメリカ社会が不思議で危うくなって来ていると思います。特に拳銃のことです。またアメリカのいわゆる根本の罪ですか、original sin、いわゆる人種問題。また、貧富の差の拡大。私と妻はまだ70年ほどしか生きていませんが、ある程度、以前よりアメリカの暮らしはよくなっていますが、まだまだ道のりが長いんです。年寄りの目から見て、アメリカよりも日本で暮らす方が安全で易しいと思います。特に安全ですよ。ほとんど心配がない。また医療もいいし、交通の便もいいし、車を運転しなくてもどこにでも行ける。アメリカはそうではないですよ。ですから、家族のために帰りたいと思っていますが、またアメリカのなんというのでしょうか、政治体制に、今も興味を持って民主主義の理想に誇りを持っていますが…。昔、私は選挙の時の政治活動では特に活発に活躍していませんでしたが、妻は日本に来るまで、バージニアでもニューヨークでも地域レベルで民主党の党活動をしていたんです。日本に来る直前、2～3年私達が住んでいた、人口7500人ぐらいの小さな町で民主党のコミティの委員長をしていたんです。妻も私も政治に興味を持って、おそらく帰ると彼女はまたそれに取り組むと思いますが、私はどうか分かりません。前は私はいつもフルタイムの仕事をしていたの

で、小規模の政治献金で参加していたんですが、それも今のアメリカは違って来たんですよ。2010年のアメリカ最高裁の判決で大金持ちや企業の政治献金の制限がなくなったんです。それは危なく、民主主義の根本的な原理に背いていると思います。

言うまでもなく、アメリカに帰って一番いいのは、英語で話せることです。ある程度、言葉の問題がなくなる。しかし、完全に無くなるという期待は現実的ではありません。言葉、同じ英語ですけれども、考え方とか感覚が違っていると通じない場合もあります。一方、長期滞在をしている私は今でも日本語の不自由が多いですよ。日本人と日本人の話の聞くと、どの程度わかっているか。今もわかっている場合がありますよ。けれども、なぜか一人一人と対話する時、わかってくれない日本人の相手はほとんどいないんです。また、その心遣いで、わかりやすくしゃべってくださると思いますが、しかし、一対一の話は特に制限がないんですね。そして、会議に出たり、講演も悪くないんです。一方的な話なんです、ある言葉とか表現がわからなくても、全体とかコンテキストから大体わかります。しかし、不自由が必ず、毎日、毎日あります。

妻のイレインは日本語を55歳になった後で、京都のYMCAで週6～8時間、それを1年、その後別のクラスで勉強しました。彼女は熱心ですよ、ノートをとるのは、彼女は素晴らしい。たくさんの手帳に単語リストを作っていて、近年は私より彼女は復習しますよ。しかし、実際に利用する機会が少なくて、日本人の友達がいますが、毎日会っていないし。ですから、限界がありました。伸びていますが、やはり穴が多いです。しかし、女性の友人から習った、私がわからない表現もかなり多い。それはいい、いい意味です。妻は日本が面白く、ここの生活が好きだと言って、言葉の限界があっても彼女はハッピーのようです。

アメリカに帰ったら息子の家族の町、フィラデルフィアの郊外ですが、そこに住むと思います。義理の娘はそこで育って、彼女の両親もそこに住んでいる町で、恐らくずっとそこにいると私達は思います。ですから、そこに住もうと。しかし、ほとんど知り合いがいりません。家族以外。私は子供の頃からあちこち両親に連れられていたんですね。新しい環境に入ることはもちろん、ちょっと恐怖心をもって気にしていますが、新しいこと、新しい場所を知るのが楽しみなんだと思います。簡単に言いますと、好奇心がまだまだあるんだと思います。

こちらの所長の経験をしてみて、やはりこのセンターの学生は優秀です。今日も奨学金を割り当てる過程の一環として学生の申請書を読んでいましたが、改めてわかったのは、ほとんどの合格者は、大学の成績はよかった、非常によかった。例外もいますが、全員ではないんですが、その大多数は本当に優れている、私より成績がいいです。Magna cum laudeとか Summa cum laude とか Phi Beta Kappa₁₉とか、センターでは多いですよ。またその推薦状は、本当にいい推薦状です。そして、研究者のキャリアを目指している学生の研究テーマ、またこれまで身につけた知識が印象的だと思います。

私が大学院に入ったのは、1968年でした。その時、特に専門知識はなかったです。また大学院に進学した時点で東アジアの言葉は韓国語を1年の学習の経験はあったんですが、日本語も中国語も一言もできなかつたんです。それでも、ハーバード大学大学院の地域研究プログラムの修士課程に合格し、奨学金ももらい、優れた先生方から熱心で親切な指導も受けることができました。今ではそれはありえないと思います。研究者育成のために、大学院博士課程後期になればもっと専門性、幅が狭い専門分野を求める圧力が高くなっていくと思うんです。自分の大学院時代もそうでしたが、まして今はそうなっていると思います。それは専門研究の発展にはいいかもしれませんが、専門家になる人間にとってはそれは必ずしもいいとは私は考えていません。日本研究といたら、日本の社会、文化、企業、いろんな団体、あるいは民間の組織に興味をもって、機会があればちょっと知りたいと思うのは当然ではないかと思うのです。日本の社会はどういうふうにいるのか、あるいは政治ですとか、専門家じゃなくても、日本のことを理解したいと思ったら、ある程度、新聞を見たり、ニュースを聞いたりしないと、日本がわからないと思います。センターの学生の優秀さには感心していますが、場合によっては視野の狭さの弱点もあるという気がしています。センターでその弱点を少しでも補えればいいのではないかと考えています。

最後に言いたいことですが、センターの教員も職員も本当に素晴らしい人達だと思います。皆さんの心遣い、また学生の個性の理解、観察眼、素晴らしいと思います。そのおかげで私は7年居候でき本当に有り難い気持ちでいっぱいです。

インタビューを終えて

バクスター先生は2009年9月に当センター所長として就任されたが、先生とこれまで多くの時間を共有していながら、先生ご自身のご経歴を伺う機会はなかった。しかし、今回、ご快諾を得てインタビューに応じていただいた。バクスター先生のような日本研究者がどのような過程を経て日本に関心を持ち、日本語を学習し、日本を含む世界を捉えたのかを伺うことは、日本研究者・実務家の育成を目的とする教育機関だけでなく、学習者にとっても、その将来の指針の手掛かりと成り得るのではないかと考え、このような記録を残すことにした。インタビューは日本語で1回につき1時間30分程度を3回にわたって行なった。実際は対話式でインタビューを行ったが、読みやすさを配慮し、一人称として整理し直し時系列をそろえ適宜編集した。

聞き手として印象的だった点をいくつか整理したい。まず、常に好奇心を持って新しい物事に挑戦し続けていらっしゃったということが挙げられる。例えば、香港に行かれたVIAのプログラムも韓国でのピースコアも、前例がなくバクスター先生達が初めて派遣される第1期にあたる存在であったこと。また、大学は西海岸であったから、大学院は東海岸をあえて選び、学术界からビジネス界への転身後、再び学术界へのキャリアチェンジといった、未知なるものへの挑戦という姿勢が常に見られるように感じた。

複雑な漢字を見て「美しい」とお感じになるところ、また日本語のみならず韓国語やスペイン語、ドイツ語といった外国語学習のある意味で「熟達者」でいらっしゃるというお話も印象に深く残った。欧米系日本語学習者の傾向として、既に他の外国語学習の経験後、日本語学習へと取り組んだという話が聞かれることが多いようである²⁰。

「世界は広いんですよ。チャレンジや難しいことがたくさんあれば、価値のある、興味のもてるものもある」とおっしゃり、常に未知なる世界への好奇心を保ち続けていらっしゃるバクスター先生の貴重なお話を聞けたことに感謝したい。副次的ではあるが、戦後からバブル期を経ての、米国や日本における若手研究者や大学環境といった戦後史の一端も断片的に知ることができたように思う。

約7年という短い間ではあったが、常に、周囲の人々へ温かいまなざしを向け支援してくださったバクスター先生に、学生・教職員を代表し心から御礼を申し上げ敬意を表したい。

注

- 1 1963年にDwight Clarkによって創設されたNPO団体Volunteers in Asia and Trans-Pacific Exchangeの略。詳細は<http://viaprograms.org/>を参照。
- 2 男子寮の生活面で学生生活を担当する世話役係。
- 3 政府や民間による教育支援プログラム。団地の子供のために屋上で行われることから命名された。
- 4 University of London (The School of Oriental and African Studies)。
- 5 Law School Admission Test。米国で法律家になるのに必要なテスト。
- 6 米国政府による途上国支援派遣プログラム。詳細は<http://www.peacecorps.gov/>を参照。
- 7 Eleanor Jordan 著『Beginning Japanese』。
- 8 Edwin Oldfather Reischauer、1961～66年までの駐日大使。
- 9 いわゆる李氏朝鮮(1392～1910)朝鮮民族最後の王朝。
- 10 米国教育省の実施するForeign Language and Area Studies Fellowships Programの略。
- 11 ハーバード大学敷地内にあるハーバード燕京研究所(Harvard-Yenching Institute)の図書館。
- 12 当センターの概要と沿革については<http://www.iucjapan.org/>内「日本研究センターの紹介」欄を参照。
- 13 Fulbright Program。日米教育委員会による奨学金制度。
- 14 Sabbatical。研究のための長期休暇。
- 15 tenure-track(研究者の終身雇用。<http://www.aaup.org/issues/tenure>を参照)によってその雇用が恒久的になるということ。
- 16 現在、大学共同利用機関は17機関。

- 17 国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館、総合地球環境学研究所、国立国語研究所、国文学研究資料館、国際日本文化研究センターの略。
- 18 報道スタイルの1つで調査し報道すること。
- 19 大学の成績 GPA (Grade Point Average) をもとに優秀な成績を収めた学生には Honors と呼ばれる優等学位が与えられ、Summa cum laude は学年トップ5% (最高栄誉)、Magna cum laude は学年トップ5~10% (大きな栄誉)。Phi Beta Kappa (ファイ・ベータ・カッパ) は、成績優秀者の友愛会のようなもの。
- 20 例えば、ドナルド・キーン、河路由佳 (2014) 『ドナルド・キーンわたしの日本語修行』白水社、ベンジャミン・ボアズ、青柳ちか (2015) 『日本のことは、マンガとゲームで学びました。』小学館、など。